

日田市埋蔵文化財調査報告書第64集

大肥祝原遺跡Ⅱ

2006年

日田市教育委員会



遺跡遠景(南から)



遺跡遠景(東から)



遺跡近景(南から)



遺跡近景(真上から)

序 文

大肥祝原遺跡は日田市の西側、大肥川沿いに開けた谷の南部に位置します。この大肥の谷は平成9年から大規模な農業基盤整備事業が行われ、それに伴って発掘調査を実施してきました。その結果、縄文時代から江戸時代にいたる遺跡や遺構、遺物が発見され、大肥川流域の歴史が次第に明らかとなってきました。

本書で報告いたします大肥祝原遺跡D区は平成11年度に発掘調査を行い、縄文時代後・晩期の遺構や数多くの縄文土器・石器が発見されていて、土器の出土量は、日田市内のこの時期の遺跡としては最大規模であることが判明しています。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後文化財の保護のために、また地域の歴史や学術研究、学校の教材などとして、ご活用・ご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業中に多大なるご指導を賜りました熊本大学甲元眞之、別府大学橘昌信両先生方をはじめ、ご支援を賜りました大分県文化課の職員の方々、さらには作業員の皆様方に対して心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年2月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄



大肥祝原遺跡D区の縄文土器の地元展示
(平成16年度の夜明出張展示より)

例 言

1. 本書は日田市教育委員会が平成11年度に実施した大肥祝原遺跡D区の発掘調査報告書である。遺跡名については、当初は大肥条里祝原地区と呼んでいたが、大肥祝原遺跡と名称を変更する。
2. 発掘調査は大明地区県営担い手育成基盤整備事業工事に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が発掘調査主体となり実施した。
3. 調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課（現、日田市農林経済部農政推進課）、大明地区ほ場整備組合組合長森山有男氏のご協力をいただいた。
4. 調査現場での実測、写真撮影は土居・行時志郎・吉田・若杉・森山・五十川が行ったほか、坂本嘉弘氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）の援助を得た。
5. 本書に掲載した遺物実測図のうち、石器は有限会社九州文化財リサーチに委託したもの、土器は雅企画有限会社に委託したものと今田が作成したものを使用し、製図については雅企画有限会社の委託によるものを使用したほか、中川照美（日田市文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
6. 空中写真は有限会社スカイサーベ이에委託し、その成果品を使用した。
7. 遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）撮影による。
8. 本書に使用している図面の方位は、すべて磁北である。
9. 写真図版に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
10. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆は、Ⅰ～Ⅲ（1）・（2）・（3）石器を土居、Ⅲ（3）土器・Ⅳを今田が行った。
12. 本書の編集は土居と今田が協議し、主に今田があたった。
13. 最後に本書を作成するにあたり、次の方々からご指導・ご協力等をいただいた。記して感謝申し上げます。

池田朋生（熊本県立芸術古墳館）、林潤也（福岡県大野城市教育委員会）、
敦賀啓一郎（福岡県北九州市立自然史・歴史博物館）、
中尾篤志（長崎県教育庁学芸文化課）



日田市の位置

本文目次

I はじめに	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査経過と調査組織	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の内容	5
(1) 調査の概要	5
(2) 遺構	6
(3) 遺物	14
IV まとめ	25

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1/5,000)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)	4
第3図 調査区区割り図 (1/800)	5
第4図 遺構配置図 (1/200)	7~8
第5図 1・2号竪穴実測図 (1/40)	9
第6図 1~5号集石実測図 (1/30)	10
第7図 1~9号土坑実測図 (1/40・1/80)	11
第8図 10~18号土坑実測図 (1/40)	12
第9図 19~29号土坑実測図 (1/40)	13
第10図 出土縄文土器実測図1 (1/3)	15
第11図 出土縄文土器実測図2 (1/3)	16
第12図 出土縄文土器実測図3 (1/3)	17
第13図 出土縄文土器実測図4 (1/3)	18
第14図 出土縄文土器実測図5 (1/3)	19
第15図 出土縄文土器実測図6 (1/3)	20
第16図 出土縄文土器実測図7 (1/3)	21
第17図 出土石器実測図1 (1/2)	22
第18図 出土石器実測図2 (1/2, 1/3)	23
第19図 出土石器実測図3 (1/3)	24

挿入写真目次

写真1 作業風景 (1)	写真2 作業風景 (2)
写真3 作業風景 (3)	写真4 作業風景 (4)

写真図版目次

- 巻頭写真図版1 上 遺跡遠景 (南から)
下 遺跡遠景 (東から)
- 巻頭写真図版2 上 遺跡近景 (南から)
下 遺跡近景 (真上から)
- 写真図版1 1・2号竪穴遺構発掘状況、1～4号集石発掘状況、1・2号土坑発掘状況
- 写真図版2 3～11号土坑発掘状況
- 写真図版3 12～19号土坑発掘状況
- 写真図版4 20～28号土坑発掘状況
- 写真図版5 29号土坑発掘状況、遺物出土状況
- 写真図版6 遺物出土状況、土層断面、縄文土器出土状況、磨製石斧出土状況
- 写真図版7 出土遺物1 (縄文土器1)
- 写真図版8 出土遺物2 (縄文土器2)
- 写真図版9 出土遺物3 (縄文土器3)
- 写真図版10 出土遺物4 (石器1)
- 写真図版11 出土遺物5 (石器2)

表 目 次

第1表	遺構一覧表	26
第2表	出土縄文土器観察表 (1)	26
第3表	出土縄文土器観察表 (2)	27
第4表	出土石器観察表	28



写真1 作業風景 (1)



写真2 作業風景 (2)



写真3 作業風景 (3)



写真4 作業風景 (4)

I はじめに

(1) 調査に至る経過

大明地区担い手育成事業は大鶴・夜明地区の水田105haを対象に、モデル営農団地を創設することを目的として平成9年度から実施されてきた事業である。これらの事業区域は周知の埋蔵文化財包蔵地である大肥条里遺跡に該当することから、市教委と県耕地課との間では各工区の工事前には事前の試掘調査を実施することとし、随時行ってきたところである。

祝原工区に関しては茶屋ノ瀬・上村工区とともに平成11年1月に試掘調査を行い、遺跡が確認されて工法変更が不可能な場所3ヵ所（A～C区）の発掘調査を実施した。

このA～C区の調査と並行して、祝原工区の一部立会調査を行った結果、遺跡の存在が新たに確認されたため、再度この取り扱いについて県耕地課と協議を行い、現状保存が不可能な約2,400mを追加調査とすることになった。この調査区をD区とし、発掘調査は平成11年9月14日～平成12年1月17日、整理作業は平成11年8月2日～平成14年3月27日まで行った。

なお、祝原工区A～D区の報告書については、それまでの「大肥条里祝原地区」を「大肥祝原遺跡」と名称変更し、A～C区分については既に報告済みである。

(2) 調査経過と調査組織

D区の発掘調査等の経過については、調査日誌に基づき、略述する。

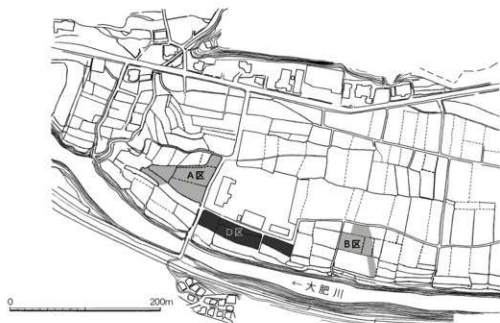
9月14日／表土剥ぎを開始し、遺構検出をはじめめる。

10月15日／サブトレンチを設定し、掘下げを開始する。

11月16日／大分県文化課坂本嘉弘主幹に現地指導をいただく。（同25日、12月1日）

1月15日／D区の空中写真撮影を行う。

1月17日／D区の調査を全て終了する。



第1図 調査区位置図 (1/5,000)

なお、調査関係者については次のとおりである。

平成11～15年度（発掘調査・整理作業）

- 調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 加藤正俊・後藤元晴（日田市教育委員会教育長）
調査指導員 甲元眞之（熊本大学教授）、橘昌信（別府大学教授）、坂本嘉弘（大分県教育委員会文化課主幹）、山田拓伸（大分県立歴史博物館学芸員）、五十川雄也（大分県教育庁文化課嘱託）
調査統括 原田俊隆・後藤清（同文化課課長）
調査事務 石井英信（同課長補佐兼文化財係長） 田中伸幸（同文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）、佐藤晃（同主幹兼埋蔵文化財係長）、佐々木豊文・島崎誠司・園田恭一郎（同文化課主査）、酒井恵（同文化課主事補）、美野寿美香、江田香織、原田恭子（同文化課臨時職員）
調査員 土居和幸（同文化課主査） 行時志郎・吉田博嗣・行時桂子（同文化課主任）、若杉竜太・渡邊隆行（同文化課主事）、森山敬一郎・五十川雄也（同文化課嘱託／現、大分市教育委員会）
発掘作業員 穂本文雄 有富房夫 有富富美子 有富領児 綾部豊 一ノ宮高喜 一ノ宮鉄成一ノ宮森男 石井多吉 石井チエ子 伊藤智恵子 井上賢信 井上定敏 井上次夫 梅崎和子 梅原剛志 猪熊ヨネ 岡部進 岡部寿美恵 梶原静馬 蒲池千万里 財津真弓 高村笑美子 太郎良開 太郎良隆明 手嶋トシエ 原宗吉 藤江望 堀次雄 三浦陽子 三俣カツ子 三俣健 三俣松夫 森山国雄 森山熊夫 森山完潔 森山さち子 森山純義 森山春義 森山ミチ子 森山八重子 安岡正憲 和田常次郎 和田紀子 和田文子
整理作業員 朝倉貞佐子 穴井トヨ子 石松裕美 井上とし子 今井由美子 石田紀代子 伊藤一美 伊藤弘子 宇野富子 鍛冶谷節子 梶原ヒトエ 黒木千鶴子 桑野純子 坂口豊子 坂本和代 佐藤みち子 中原琴枝 聖川鶴子 平川優子 森山さち子 安元百合 吉田千津子 和田ケイ子

平成17年度（報告書作成）

- 調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括 後藤清（同文化財保護課課長）
調査事務 高倉隆人（同課長補佐兼埋蔵文化財係長）、伊藤京子（同課専門員）、中村邦宏（同課主事補）
調査員 土居和幸（同課副主幹）、今田秀樹・行時桂子・若杉竜太・渡邊隆行（同課主任）、矢羽田幸宏（同課主事補）

II 遺跡の立地と環境 (第2図)

遺跡は日田盆地西側にあたる大肥川沿いの谷の一角に位置する。大肥川は日田市最北端に位置する岳減鬼山に源を発する鶴河内川と、福岡県小石原村に源を発する大肥川が谷の北部で合流して大肥川となり、さらに南流して筑後川と合流する。大肥川流域の谷は長さがおよそ4.7km、幅は最大で約400mと狭隘な谷部を形成しており、平安期には大宰府安楽寺に寄進され「大肥荘」と呼ばれる水田地帯であったことが知られている。

大肥祝原遺跡は大肥川下流の右岸段丘上に立地する。遺跡の対岸は山地斜面が川のすぐそばまで迫っているのに対し、遺跡周辺はある程度の面的な広がりを持ち、現在山裾には集落が、平坦部には水田耕作地が広がる。

次に、大肥川沿いの遺跡を概観するが、これまでにこの地域での遺跡の存在はあまり知られておらず、古くから周知されている遺跡には、縄文遺跡である若宮八幡宮岩陰遺跡、弥生時代の箱式石棺墓が発見された中村遺跡、古墳時代の横穴墓が確認されている中島横穴墓程度であり、今回の基盤整備事業に伴う調査によって、その姿が次第に明らかとなってきている。

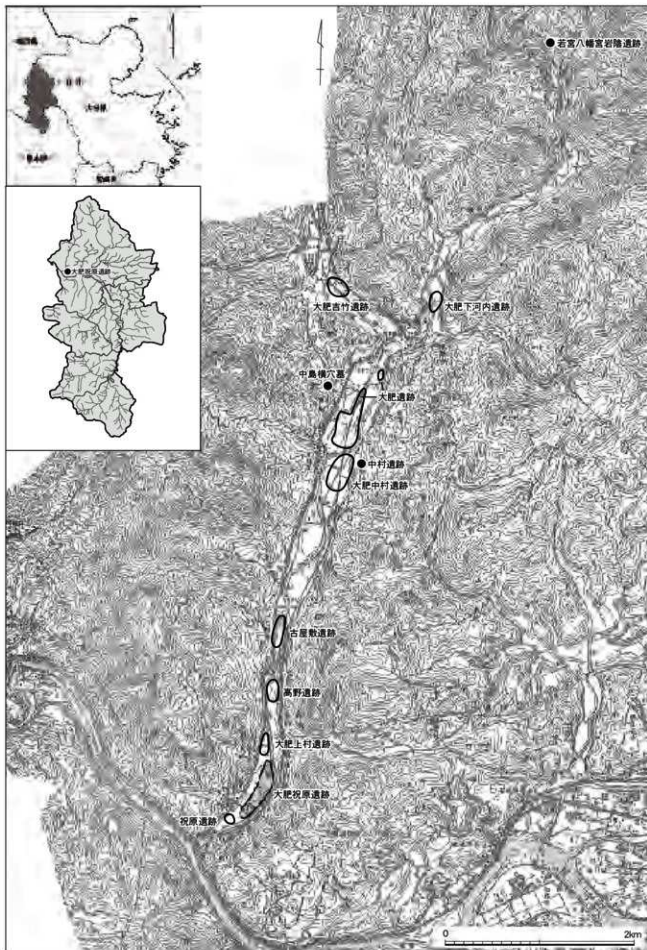
鶴河内川左岸段丘上にある大肥下河内遺跡^{註1)}では、縄文時代前期の土器や石器のほか集石跡が発掘調査されている。大肥川左岸段丘上にある大肥吉竹遺跡^{註2)}では、縄文時代中期の船元式土器の発見をはじめ、古墳時代後期～奈良時代の堅穴住居跡や掘立柱建物などで構成される集落跡が検出され、とくに奈良期の住居跡からは朱墨土器や硯が出土するなど、律令期には郷の中心的な公的施設としての機能を果たしていたとされる。

大肥川上流右岸の大肥遺跡^{註3)}では、弥生時代中期～後期の集落や旧河道、中期の甕棺墓・石棺墓、古墳時代中期の集落などが確認されており、該期の遺跡としては流域では最大規模を誇る。とくに注目されるのが旧河道で、そこからは三叉鉞や鋤などの木製農具や木製短甲^{註4)}などの木製品が、土器などと一緒に大量に出土している。大肥遺跡の対岸段丘上に広がる大肥中村遺跡^{註5)}では、弥生時代中期～後期にかけての木棺墓・甕棺墓・石棺墓や、古墳時代～近世に至る時代の集落や墓地のほか鍛冶遺構などが発掘されている。

この他にも大肥川下流域の段丘上には、縄文時代や中世の遺構が確認された古屋敷遺跡^{註6)}、弥生時代や中世の集落が調査された高野遺跡^{註7)}、弥生時代の小児棺が発掘された大肥上村遺跡^{註8)}、中・近世の集落跡が判明した祝原遺跡^{註9)}などがあり、この大肥川流域沿いは①市内に比べ縄文時代の遺跡が比較的多く点在し、②北部九州の弥生文化を受け入れた弥生遺跡が見受けられ、③市内でも数少ない古墳時代中期の遺跡が認められるという特徴がある。

註

- 1) 渡邊隆行編 『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004
- 2) 渡邊隆行編 『大肥遺跡1』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 日田市教育委員会 2004
- 3) 行時志郎編 『大肥中村遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会 2003
行時桂子編 『大肥中村遺跡1』日田市埋蔵文化財調査報告書第62集 日田市教育委員会 2006
- 4) 渡邊隆行編 『古屋敷遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第56集 日田市教育委員会 2004
- 5) 若杉竜太編 『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集 日田市教育委員会 2003
- 6) 行時桂子編 『祝原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第61集 日田市教育委員会 2005



第2図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

Ⅲ 調査の内容

(1) 調査の概要

大肥祝原遺跡D区は夜明小学校東側に位置し、すぐ南側はA区にあたり、東側を大肥川が流れている。調査区は現在の水田盤除去後のレベルが北から南にかけて緩やかな傾斜をなしており、そのレベル差は約1mを測る。

今回のD区の発掘調査にあたっては調査区域内を10m×8mの方眼状に区割りし、南北方向を南からA・B・C・D…といったアルファベット、東西方向を西から1・2・3…といった数字を付し、遺構図や遺構に伴わない遺物の実測図・取上げなどの作業は、こうした区割りをを用いることにした。

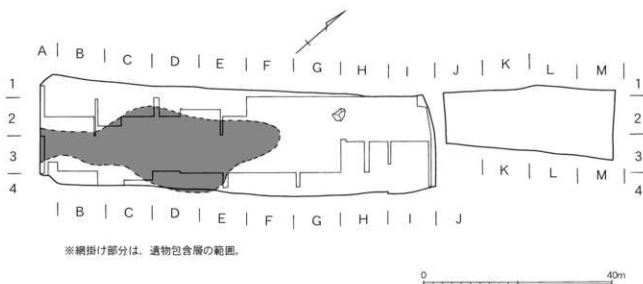
また、調査区の南北方向に1本、東西方向に6本と必要に応じて土層観察用のサブトレンチを設定し、土層の堆積状況を観察しながら調査を進めた。

調査においては、遺構は全て完掘を行い、その記録に努めたが、遺物を包含する層については調査期間も限られていたため、第3図に示す範囲のみの掘下げとした。

この調査区で確認できた遺構は竪穴2基、集石5基、土坑29基、ピット多数で、これら遺構はほぼ調査区の全てにわたって分布しているが、主に調査区の中央から南側にかけての範囲にまとまってみられる傾向にある。

さらに調査では、調査区中央から南側にあたるA～E・2・3区割りの土層が溝状の堆積をなしていて、10数枚ある土層中からは集中的に遺物が出土していることが判明している。

なお、現場中の遺構番号が、その後の整理段階において変更が生じてきており、その対応関係については遺構一覧表のなかに明記している。



第3図 調査区区割り図 (1/800)

(2) 遺構

D区での遺構は竪穴・集石・土坑・ピットを検出したほかに、樹木倒壊痕や攪乱坑なども存在した。以下、竪穴・集石・土坑の各遺構についてまとめる。

竪穴 (第5図、図版1)

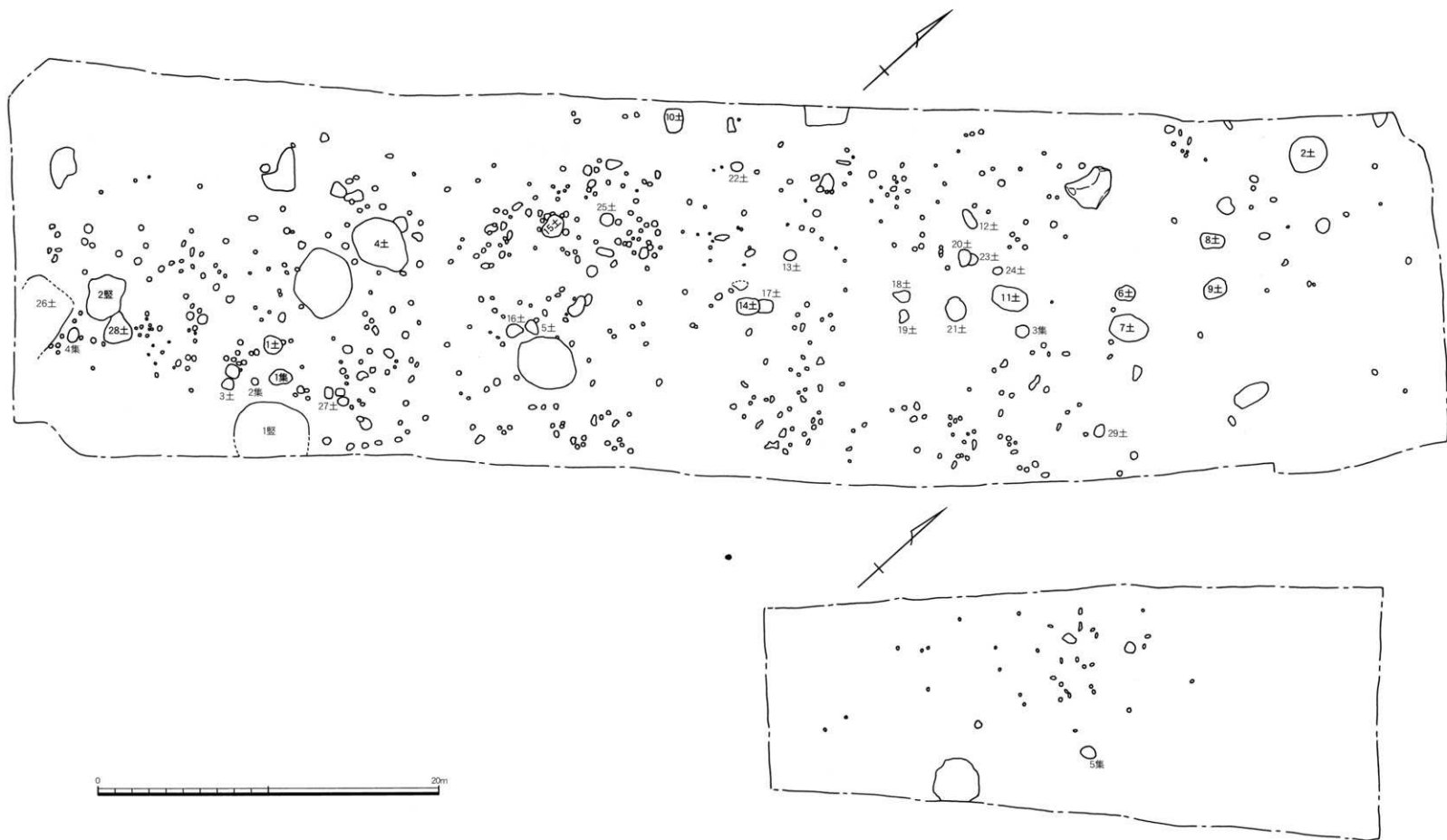
調査区の南側で2基を確認した。1号は全体の半分程しか掘っておらず、平面プランは円形を呈するものと思われる。その規模からみて竪穴住居とも考えることができそうだが、炉や柱穴などの付属施設が確認できなかったことから竪穴と判断した。縄文土器が出土している。2号は一見すると不整形にも見えるが、隅丸方形に近い平面プランが想定される。竪穴の掘方はしっかりしており、南北土層確認トレンチにおいて焼土の存在が確認された。縄文土器のほか礫が出土している。

集石 (第6図、図版1)

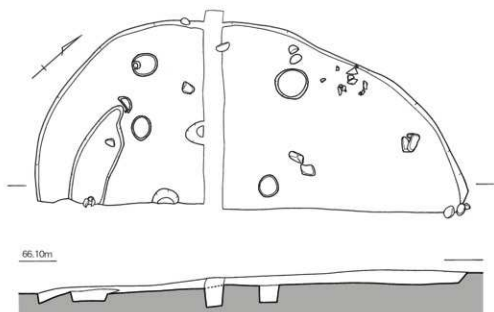
調査段階では8号までの集石番号を付していたが、およそ集石として間違いなさそうな遺構のみに改めた。1号は浅い皿状の土坑上部に17個の拳大の礫を楕円形に敷き詰めるように配置し、その上には拳大前後の礫が重なるようにみられる。大半の礫は表面が赤変している。2号も1号と同様に16個の拳大前後の礫を円形に敷き詰め、その上に拳大前後の礫が重なるようにみられる。3号は礫の数こそ少ないが、まとまりと礫の赤変により集石と考えた。ただし土坑は掘り過ぎであろう。4号は楕円形をなす皿状の土坑上部に、まず頭大の礫1個を中央に据え、その周りに拳大の礫を配置し、さらにその周囲に頭大の礫を配して花弁状としている。礫の大半は赤変や表面剥離が著しい。5号は赤変した拳大から頭大の礫のまとまりがみられたので、集石と考えた。ただし土坑は掘り過ぎであろう。

土坑 (第7～9図、図版1～5)

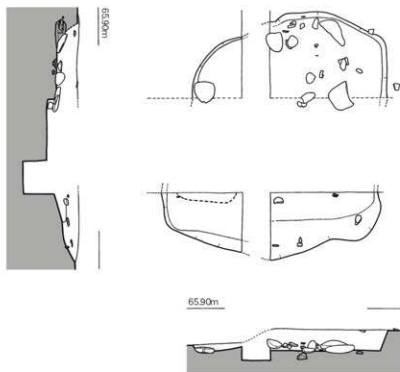
今回検出した土坑は29基を数え、その平面プランも円形、楕円形、隅丸長方形、不整形をなしており、深さも10cmから1mを越えるものもある。このように規模・形態はまちまちであるが、内部からは礫や赤変した礫を伴うものが目立つ。出土遺物はそのほとんどが縄文土器である。1号は土坑上面に頭大の礫がまとまってみられ、なかには赤変しているものも散見される。4号は大型の土坑で、遺構の残りはよくない。縄文土器が出土している。6・8号からは縄文土器が出土している。10・11・13号からは縄文土器のほか、拳大の礫・赤変した礫が出土している。12号からは縄文土器が出土している。14号は17号に切られており、いずれの土坑からも縄文土器や拳大の礫・赤変した礫が出土している。15・16号からは縄文土器や礫が出土している。19号からは大きな礫や縄文土器が出土している。20号は23号を切り、20号からは縄文土器が出土している。21号からは縄文土器が出土している。22号からは縄文土器や礫が出土している。25号からは縄文土器が出土している。27号からは拳大の礫や赤変した礫が出土している。28号からは縄文土器が出土している。29号からは拳大の礫や赤変した礫に混じって縄文土器が出土している。



第4図 遺構配置図 (1/200)



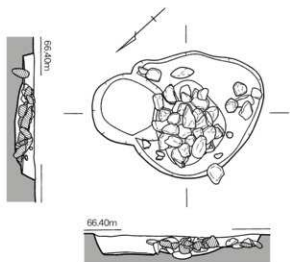
1号竖穴



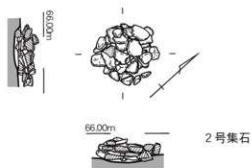
2号竖穴

0 2m

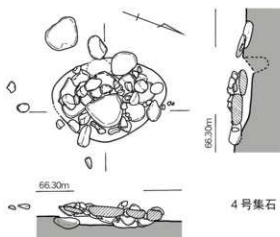
第5図 1・2号竖穴実測図 (1/40)



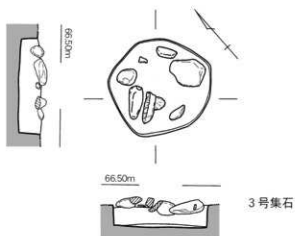
1号集石



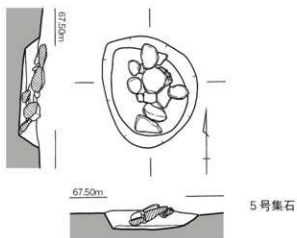
2号集石



4号集石



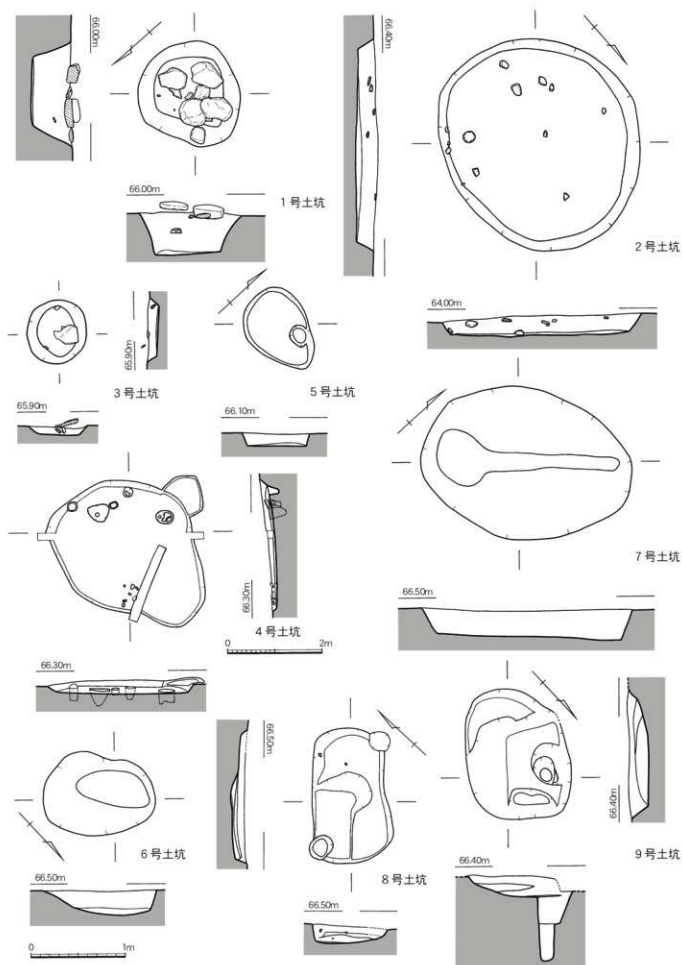
3号集石



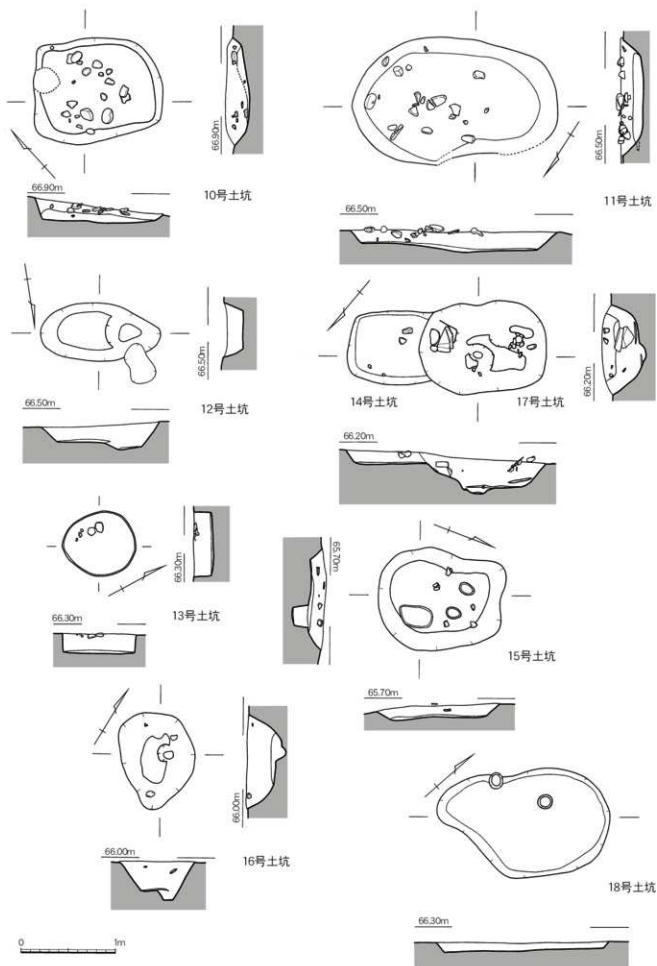
5号集石



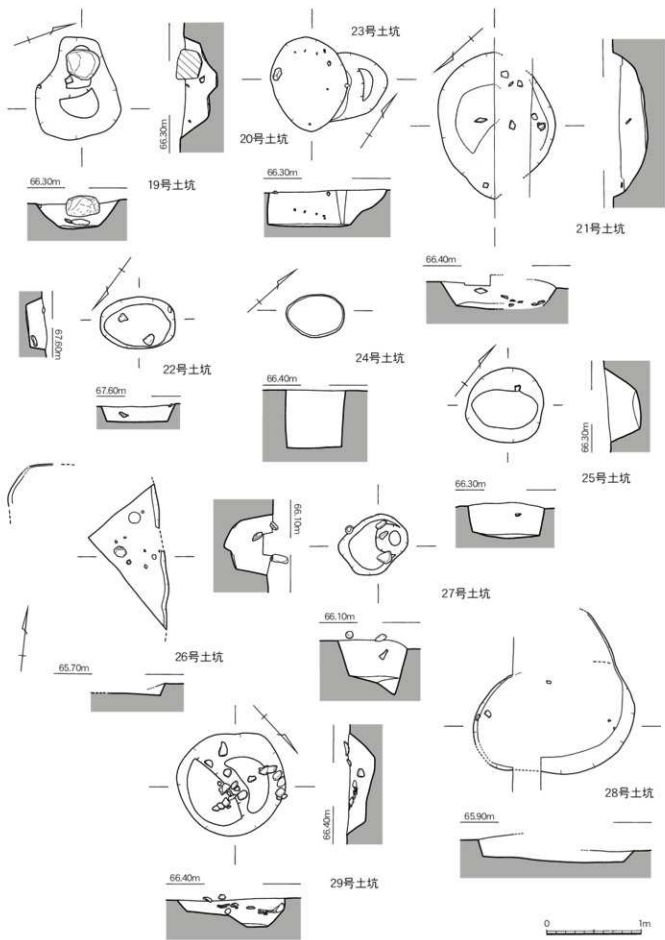
第6图 1~5号集石実測図 (1/30)



第7图 1~9号土坑实测图 (1~3·5~9号 1/40, 4号 1/80)



第8图 10~18号土坑实测图 (1/40)



第9图 19~29号土坑实测图 (1/40)

(3) 遺物

土器 (第10～16図、図版7～9)

1・2は縄文中期の所産とみられるものである。1は船元式土器の胴部片である。胴部のくびれ部外面付近には貼付された粘土帯が2条見られ、その上には爪形文が施されている。2は口縁外面に凹線による文様、口唇部に波状刻目が施されたものである。その特徴から阿高式土器と思われる。3は鉢形土器の胴部下半部であり、いわゆる磨消縄文土器である。縄文部と磨消部を分ける沈線は浅い。縄文後期初頭の中津式土器であろう。4は鉢形の土器である。胴部には沈線により蕨手形のモチーフを施文している。器形や文様モチーフから、3と同様の時期が考えられよう。

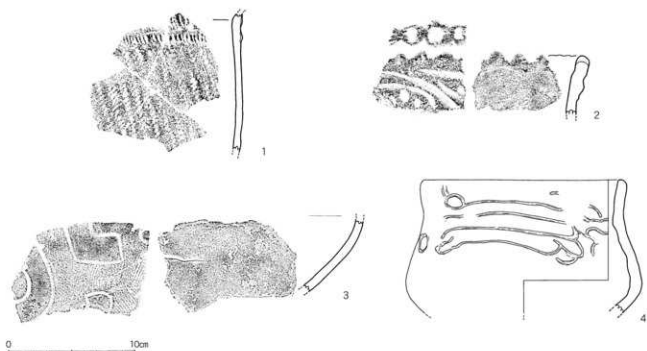
5から16は後期前葉の磨消縄文土器である。5～9は3本沈線磨消縄文の施された一群であり、口縁部付近より下の文様は、縦方向に展開している。5～7はいわゆる植木鉢形を呈する鉢形土器である。9は胴部が丸く膨らむ器形となる。10～16は2本沈線磨消縄文の施された一群であり、文様は横位区画が展開していく構成となっている。10は浅い鉢形を呈するものである。内面、口縁部下には1段の稜がみられる。11・12は口縁部付近のものである。13・14の胴部片からは円文と方形区画文による文様構成が窺われる。15・16は文様施文や器面調整から同一個体とみられる。5～9は福田K2式土器、10～16は宿毛式土器の範疇に収まるものである。

17～26は口縁部上面施文型の縁帯文土器である。17・18・20・22などから口縁部文様帯の集約部には渦巻文・同心円文ないしはそれらが元となっている文様が施されていることが看取される。21のそれは同心円文を浮き立たせた大きな突起となっている。23は文様集約部の中心部が欠落しているものの、残されている部分からその中心の突起が耳状であった可能性が指摘出来る。24～26の口縁部文様帯には斜め刻目が連続的に施されている。24・25の文様集約部は突起状に隆起し、沈線により同心円文が施されている。何れも頭部文様は見られないが、17の胴部には沈線により文様が描かれている。なお、18・19は同一個体とみられる。これらの一群は後期の前半に置くことの出来るものである。

27・28は後期中葉のいわゆる小池原上層式土器である。27は口縁部片であり、波頂部下に橋状把手を有している。28は胴部屈曲部近くから下位の部分の破片である。29はその器形、把手のあり方、口縁の波頂部の形状などから、小池原上層式に伴うものとみられる。

30・31は後期阿高式系土器とみられるものである。ともに口唇部に波状刻目を有しており、口縁部外面に30は凹線文、31は指頭によるとみられる刺突文が施されている。後期初頭～前葉に位置付けられよう。

32～56には後期前半の所産とみられるものを一括している。32～34は縄文の施されたものである。32は口縁部内面施文型の縁帯文土器とみられる。34は椀形となる器形のものである。胴部下半は沈線により文様が描かれているが、その上位の肥厚させた部分の文様は縄文と沈線によるものであり、沈線間には刺突がみられる。35の文様帯は粘土貼付により強調され、そこには巻貝による擬似縄文が施されている。36・37は凹線により文様の施されたものである。38の文様は、口縁部外面は沈線、口唇部付近は刺突文を施した粘土紐貼付による構成となっている。39・40は口縁部外面に2条の刺突文が施されたものである。39は爪形の刺突連点であり、口唇部にもみられる。40の口縁部は波状をなしている。41には口唇部に紐状に組まれた突起が付けられ



第10図 出土縄文土器実測図1 (1/3)

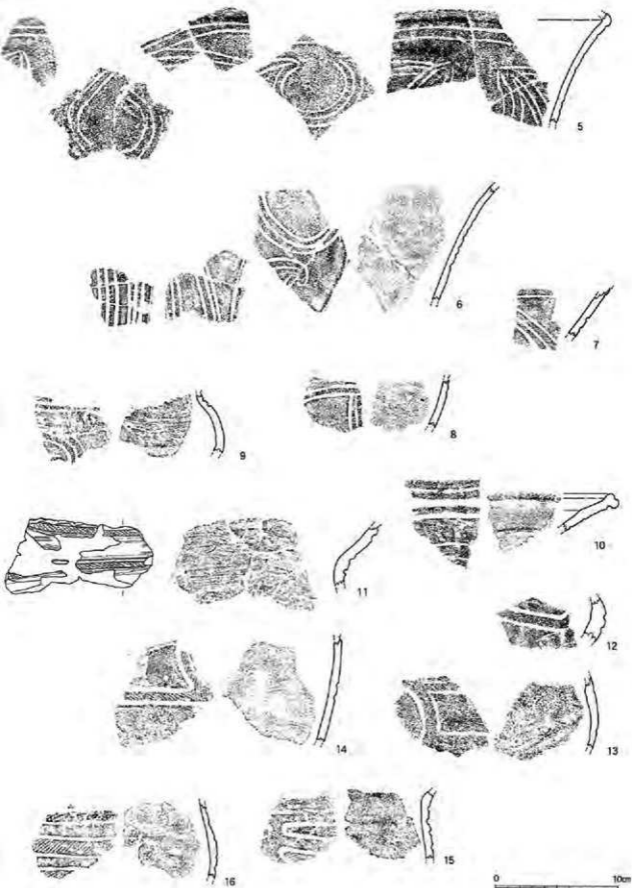
にも粘土紐貼付による文様がみられる。43～48は刺突文の施された一群である。43の口縁波頂部には穿孔がみられる。49～51は口唇部に短沈線による刻目を有するものである。50の波頂部には刺突が1つある。51は口唇上部に1条の沈線を廻らせ、その外側に刻目を有している。なお、口唇外面下にも1条の沈線を廻らせている。52は波頂部および若干肥厚させた口縁部下に刻目、その下に沈線による文様の施されたものである。53・54には入組文がみられる。

57～67は後期後葉の三万田式土器である。57～61は前時期の西平式土器と同様の器形となる一群である。57は波状口縁、58・59は平口縁となる。60・61の胴部文様は磨消縄文によって構成されているが、59には押引文も施されている。62は椀形の器形をなすものである。64～67は凹線文の施された一群である。64は深鉢、65～67は浅鉢である。

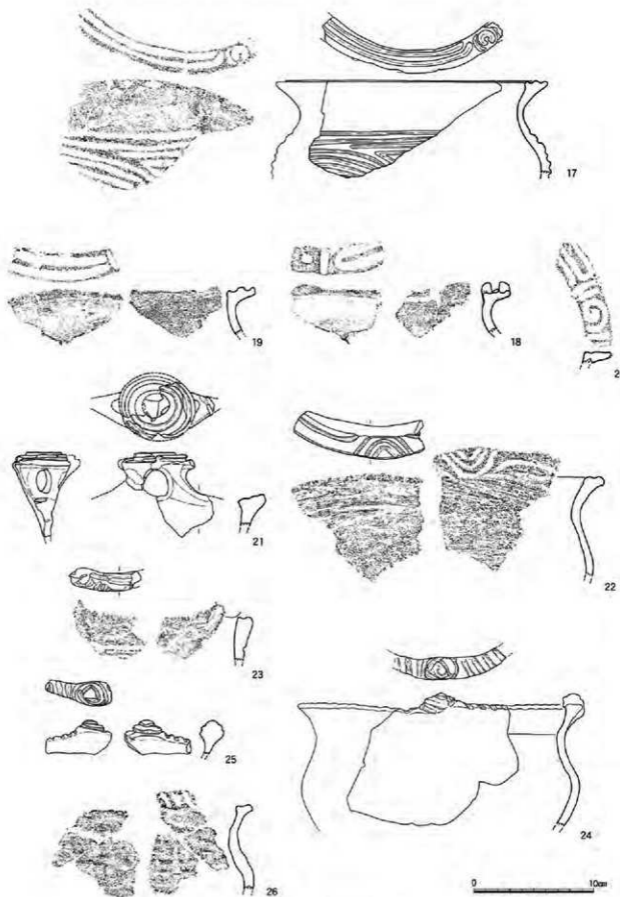
68～76は晩期の所産とみられるものである。68・69は浅鉢である。70は鉢形の器形をなすものである。内外面には前工程の条痕が明瞭に残されており、さらには外面にはりボン状の突起を貼付している。71～73は無刻目突帯文土器の口縁部片である。71の突帯は断面三角形であるが、73のそれは台形となっている。74～76は刻目突帯文土器の口縁部片である。口縁部は、74が内傾、76が外傾し、75は胴部屈曲部から緩く外反して立ち上がっている。

77は土器片加工品である。一部を新しく欠損しているが、本来は円形に加工したものとみられる。周縁部は打ち欠きにより整形されており、縁に近い部分には孔が穿たれている。

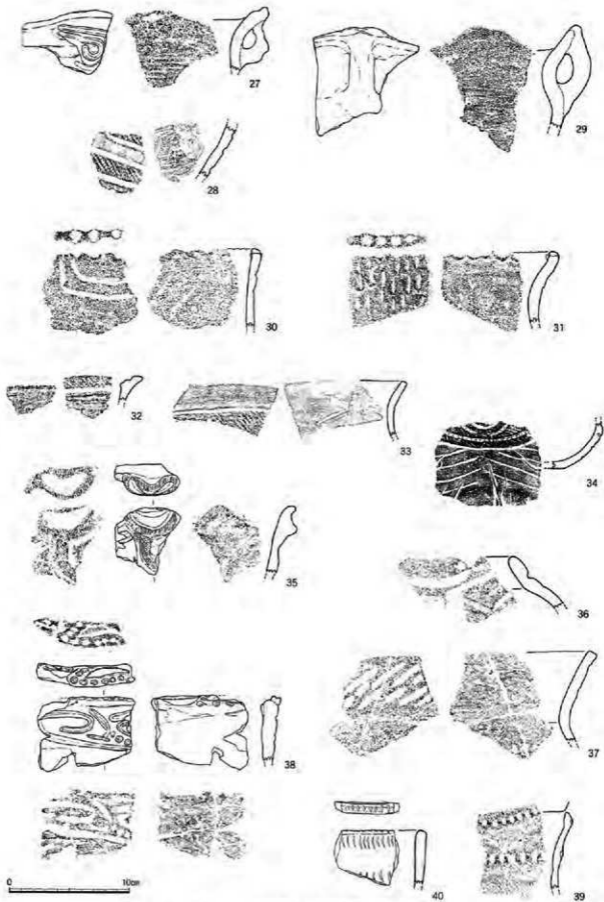
78は手づくね土器である。器面調整は手づくね後、工具により整形している。平面形は木ノ葉形であり、断面は皿状に中央が深くなる器形である。



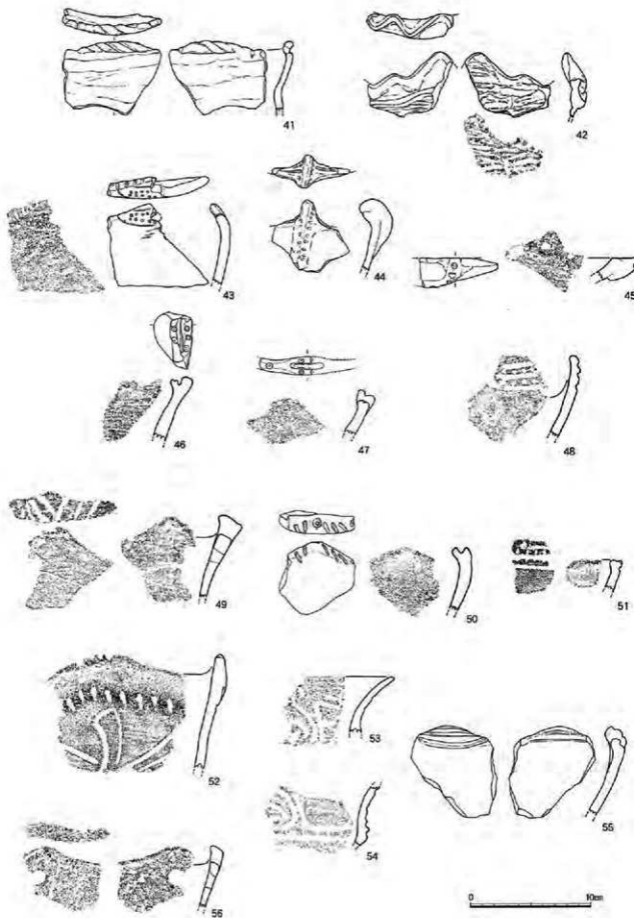
第11圖 出土繩文土器実測圖2 (1/3)



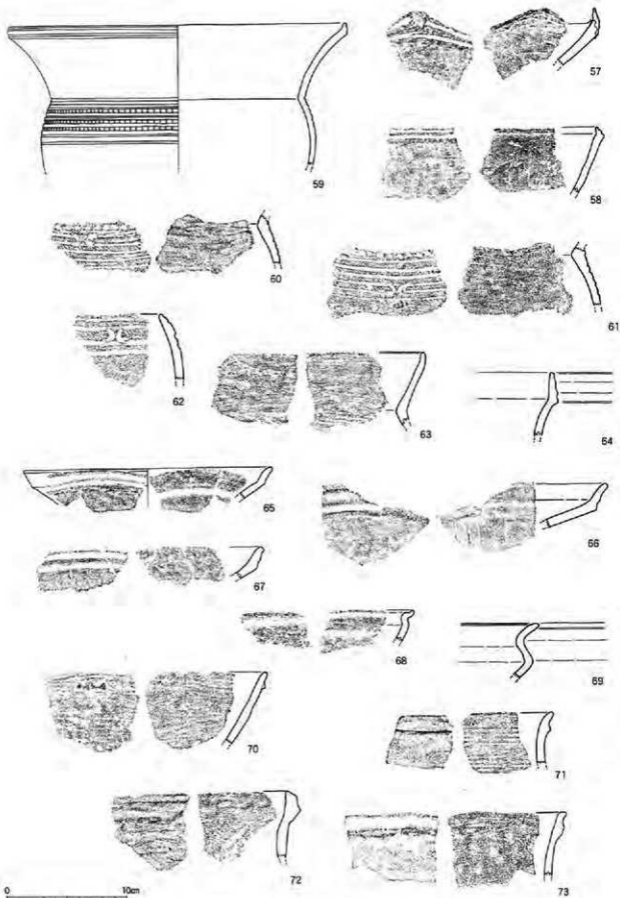
第12圖 出土縄文土器実測圖3 (1/3)



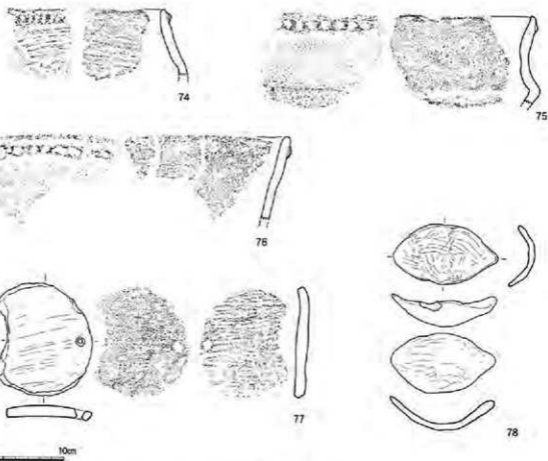
第13圖 出土繩文土器実測圖 4 (1/3)



第14圖 出土繩文土器実測圖 5 (1/3)



第15圖 出土繩文土器実測圖6 (1/3)



第16図 出土縄文土器実測図7 (1/3)

石器 (第17～19図、図版10・11)

1から32は石鏃である。1～11は無茎鏃で、1～6は基部が直線的、7～9は基部がわずかに突出し、10・11は基部が内湾する。12～21は脚が短く、22・23は脚が長い。24～32は鋸歯鏃で、24～27は脚部が短く、31・32は全体的に長い。

33から37はスクレイパーである。33は基部に入念な二次加工が施されたエンドスクレイパーである。34・37は両面から、35は側面に片面側から丁寧な二次加工が施されている。

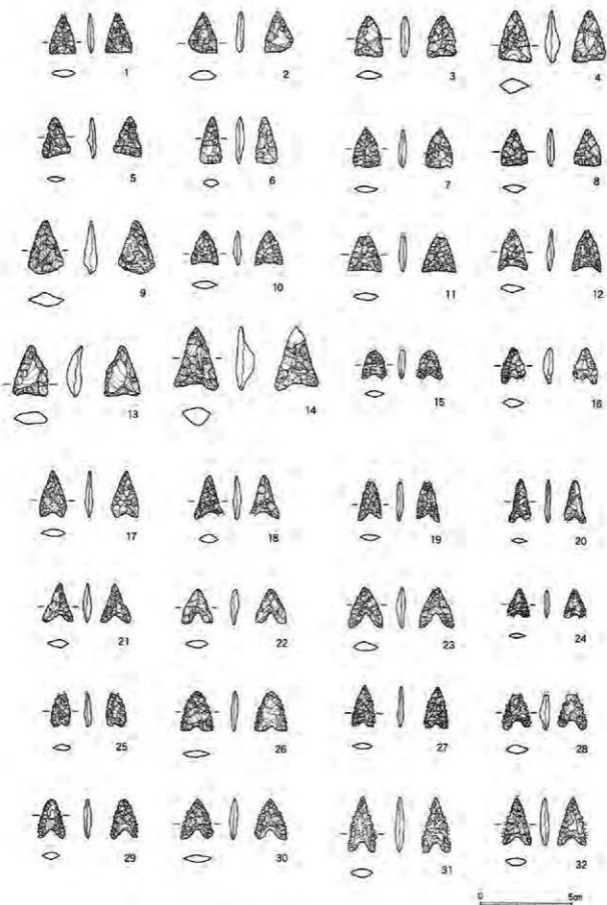
38・39は二次加工剥片である。いずれも縦長剥片の側辺部に加工が施されている。

40・41は縦長剥片である。いずれも使用痕ともとれる細かな刃こぼれがみられる。

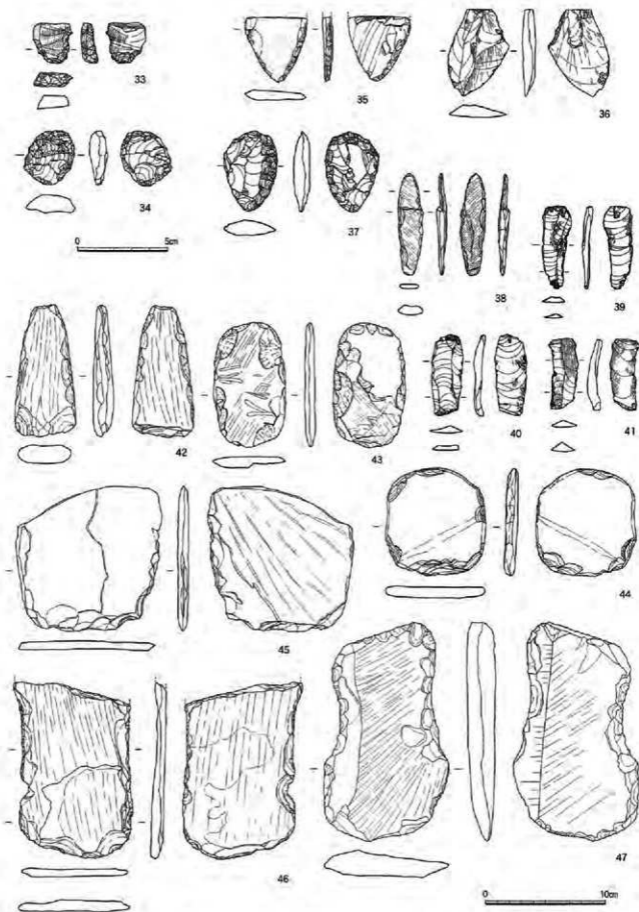
42から48は打製石斧である。44は円形に近く、周辺部に簡単な加工が施されている。47は撥形を呈す。

49から58は磨製石斧である。49・50は部分的に磨かれている。54は扁平な断面形態で、58は細身、56は刃部が「ノ」の字状を呈する。

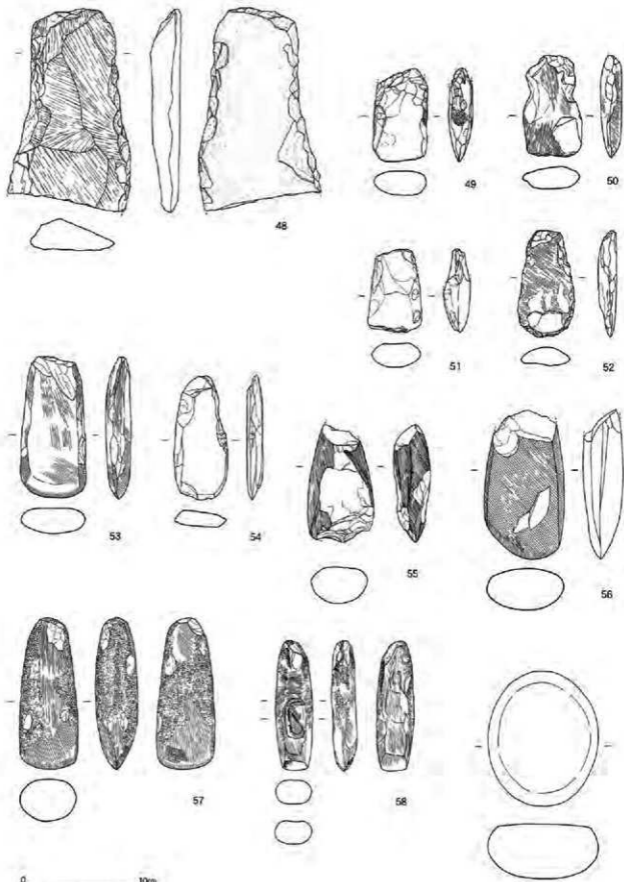
59は磨石である。片面には平坦化した磨り面が顕著に残る。



第17图 出土石器实测图1 (1/2)



第18图 出土石器实测图2 (33~34 1/2, 35~47 1/3)



第19圖 出土石器実測圖3 (1/3)

IV ま と め

今回報告した大肥祝原遺跡D区の調査では、縄文時代の多くの遺物と遺構を確認した。

多量に出土した縄文土器は、少量の中期の土器を含むものの、そのほとんどは後・晩期のものである。今回の報告に際しては、これらの土器すべてを1点ずつ確認するということは出来なかったため、時期判断の可能な資料を中心に抽出することとした。こうした作業の結果、後期前半（前葉～中葉の前半部分）・後期後葉・晩期前半・晩期後半の資料が比較的纏まっていることが把握出来た。この中で特に注目されるのは、福田K2式・宿毛式土器や口縁部上面施文型の緑帯文土器などを中心とする後期前半の資料の豊富さである。大分県西部でこれらの土器が纏まって出土している例は無く、当時の情報の流入ルートなどを考えていく上で非常に興味深い。

石器については、前章に提示している石鏃・磨製石斧・打製石斧・スクレイパー・磨石などのほかに、石匙や台石、石錐・横刃形石器・石皿とみられる製品を含む多くの石器類が出土している。しかし、前述の土器と同様、今回の報告においては、これら多くの石器を確認・抽出するまでには至れなかった。これら石器の中で一見して注目に値するのは、石鏃の中に一定量みられる鋸歯鏃の存在である。その比率は全体の約4分の1程度であり、九州でも内陸部に位置する本遺跡においての鋸歯鏃のあり方は特異と言える。

次に遺構をみでみる。遺構は竪穴2基・集石5基・土坑29基などが検出されている。これらの所属時期については、そこからの出土遺物がすべて縄文土器とみられること、調査範囲内から縄文時代以外の遺物がほとんど出土していないことなどから、縄文時代の所産とみることが出来よう。時期判断の可能な土器が出土した遺構は、複数挙げる事が出来る。1号竪穴からは後期後葉の三万田式土器が、2号竪穴からは後期前葉の福田K2式土器や阿高式系土器が出土している。その他、後期前半の所産とみられる土器片が認められた遺構として、6・8・14・15・16・18・21号土坑が挙げられる。これら遺構の時期をすぐさま、その出土遺物の時期に比定することは出来ない。しかし、例えば後期前半（特に前葉）の遺構などは大分県内では少ないため、今後当時の生活を考える上で良い材料となるやもしれない。また、集石には明確な遺物こそ伴っていないものの、調査地で多量に確認されている後・晩期の土器に伴う遺構であるとするならば、該期の集石があまり知られていない大分県内はもとより、北部九州内においても貴重な事例になるものと思われる。

以上、簡単であるが発掘調査で得る事の出来た情報を概観してみた。本遺跡は縄文時代遺跡としては、本地域で重要な位置に置かれるものであり、今後、再整理の必要性を感じている。

【追記】

平成18年1月22日、埋蔵文化財係長を務められた田中伸幸氏が永眠された。見た目も中身も大きな方で、担当者が発掘調査現場や報告書作成で疲れているときには必ず優しい言葉で励ましてくださる、尊敬すべき係長であった。1年3ヶ月もの闘病生活を余儀なくされたが病魔には勝てず、享年47才という若さで旅立たれた。生前のご指導に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

合 掌

第1表 遺構一覽表

棟目番号	遺構名	別名称	区割り	形状	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	深さ (cm)	備	考
第5回	1号竪穴	1号竪穴	B-3-4, C-3-4	円形	456	199+α	15		
第5回	2号竪穴	2号竪穴	B-2-3	不整形	257	228	22		
第6回	1号集石	1号集石	C-3	不整形	67	55	8		
第6回	2号集石	2号集石	B-3	円形	38	34	3		
第6回	3号集石	5号集石	G-3	円形	—	—	—		
第6回	4号集石	7号集石	A-3	不整形	90	67	7		
第6回	5号集石	8号集石	K-3・4	不整形	89	74	14		
第7回	1号土坑	1号土坑	C-3	不整形	112	108	44		
第7回	2号土坑	3号土坑	I-2	楕円形	231	205	18		
第7回	3号土坑	4号土坑	B-3	円形	67	63	10		
第7回	4号土坑	5号土坑	C-2	不整形	356	286	16		
第7回	5号土坑	7号土坑	D-3	不整形	94	66	40		
第7回	6号土坑	8号土坑	H-3	不整形	119	100	25		
第7回	7号土坑	9号土坑	H-3	楕円形	222	80	32.5		
第7回	8号土坑	10号土坑	H-2	楕丸長方形	145	84	20		
第7回	9号土坑	11号土坑	H-3	不整形	133	110	20		
第8回	10号土坑	12号土坑	E-1	不整形	138	112	24		
第8回	11号土坑	13号土坑	G-3	不整形	217	137	22		
第8回	12号土坑	15号土坑	G-2	楕円形	127	62	29		
第8回	13号土坑	16号土坑	F-2	円形	78	68	21		
第8回	14号土坑	17号土坑	E・F-3	楕丸長方形	90+α	78	15		
第8回	15号土坑	18号土坑	D-2	不整形	133	110	15		
第8回	16号土坑	19号土坑	D-3	不整形	102	79	30		
第8回	17号土坑	21号土坑	F-3	楕丸長方形	134	96	37		
第8回	18号土坑	23号土坑	F-3	不整形	182	114	56		
第8回	19号土坑	24号土坑	F-3	不整形	110	90	33		
第9回	20号土坑	25号土坑	G-3	楕円形	100	80	39		
第9回	21号土坑	26号土坑	G-3	不整形	133	121	38		
第9回	22号土坑	28号土坑	E-2	楕円形	78	55	17		
第9回	23号土坑	29号土坑	G-2	楕円形?	65+α	70	34		
第9回	24号土坑	30号土坑	G-3	楕円形	62	46	120		
第9回	25号土坑	31号土坑	E-2	円形	80	79	33		
第9回	26号土坑	33・34号土坑	A-2-3	楕丸長方形?	170+α	150+α	13		
第9回	27号土坑	37号土坑	C-3	不整形	68	56	45		
第9回	28号土坑	38号土坑	B-3	楕円形?	172	115+α	25		
第9回	29号土坑	39号土坑	G・H-4	円形	113	109	30		

第2表 出土縄文土器観察表(1)

棟目番号	写真 回数	出土位置等 (注記)	器 形 類 別			色 調			胎 土					備 考	
			外 面	上 面	内 面	外 面	上 面	内 面	角 四 石	鱗 石	雲 母	白 色 色 層	黒 色 色 層		
第10回	1	一括	縄文→ナギサ	—	丁字→ナギサ	灰黄褐色	—	灰褐色	○	○	○	○	○		
第10回	2	C3-17(2)5層	白磁→ナギ	—	ナギ	灰赤茶色	—	灰赤茶色	○	○	○	○	○		
第10回	3	C3-8	縄文→灰層→丁字 →ナギサ	—	丁字→ナギ	黄褐色	—	灰黄褐色	○	○	○	○	○		
第10回	4	C3-30(3)+C3-303+C3-302+C3-304(2)小	赤磁→二枚貝小→ 丁字→ナギ	—	赤磁→二枚貝小→ 丁字→ナギ	黒灰褐色	—	黒黒灰褐色	○	○	○	○	○		
第11回	5	2土界1-3-4-5-6 →36→C2-17 1+C3-341・ 342+D2-3-3(1)磁石	縄文→灰層→ミガキ	—	ミガキ	明黄土色	—	灰黒褐色	○	○	○	○	○		
第11回	6	C2-40(1)土層 →C3-30層+C2-17	縄文→灰層→ミガキ	—	ミガキ	明茶褐色	—	灰茶褐色	○	○	○	○	○		
第11回	7	C3-9(1)4'	縄文→灰層→ミガキ	—	ミガキ	灰褐色	—	灰黒褐色	○	○	○	○	○	外面、赤色顔料付着	
第11回	8	D9-5(2)	縄文→灰層→ミガキ	—	丁字→ナギ	白褐色	—	茶褐色	○	○	○	○	○		
第11回	9	F3(2)	縄文→灰層→ミガキ	—	赤磁→ミガキ	灰黄褐色	—	明黄褐色	○	○	○	○	○		
第11回	10	E2-30層	縄文→灰層→ミガキ	—	ミガキ	灰褐色	—	茶色	○	○	○	○	○		
第11回	11	C3-7(1)	赤磁(唐貝?)→ 縄文→灰層→ナギ	—	赤磁(唐貝?)→ ハ9杖工以上のナギ	明黄土色	—	灰黄土色	○	○	○	○	○		
第11回	12	一括	縄文→灰層→ミガキ	—	丁字→ナギ	黄褐色	—	灰黄土色	○	○	○	○	○		
第11回	13	C3-3(2)	縄文→灰層→ナギ	—	赤磁→ナギ	灰黄茶色	—	灰褐色	○	○	○	○	○		
第11回	14	B3-24	不明	不明	不明	明黄褐色	—	灰黄褐色	○	○	○	○	○		
第11回	15	C2-60(2)5層	縄文→灰層→ナギ	—	丁字→ナギ	灰灰褐色	—	灰灰褐色	○	○	○	○	○		
第11回	16	C2(3)	縄文→灰層→ミガキ	—	丁字→ナギ	灰黄灰褐色	—	灰褐色	○	○	○	○	○		
第11回	17	C3-364	灰層→ミガキ	灰層→不明	ミガキ	灰黄褐色	灰黄灰色	灰黄灰褐色	○	○	○	○	○		
第11回	18	C2-11	ミガキ	灰層→ミガキ	ミガキ	明茶色	明黒褐色	灰褐色	○	○	○	○	○		
第11回	19	C2-5層 60(2)	ミガキ	灰層→ミガキ	ミガキ	灰茶色	茶褐色	灰茶褐色	○	○	○	○	○		

第3表 出土縄文土器観察表(2)

神田番号	写真 図例	出土位置等 (注 記)	器 面 調 整			色 調			胎 土				備 考		
			外 面	上 面	内 面	外 面	上 面	内 面	角 門石	石 英	白 色 粘 土	黒 色 粘 土			
第1502 20	8	E3 P3	不明瞭	沈澱→不明瞭	不明瞭	淡黄褐色	淡黄土色	淡黄褐色							
第1502 21	8	G2 S04	ミガキ	—	—	工具によるナゾ	淡灰褐色	—	淡灰褐色	○	○	○	○		
第1502 22	7	C303	巻貝殻→ミガキ	沈澱→ミガキ	巻貝殻→ミガキ	明黄褐色	明黄褐色	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 23	—	E2 S1(1)	沈澱→ナゾ	沈澱→朝日→ナゾ	ナゾ	淡灰褐色	淡褐色	明黄褐色	○	○	○	○			
第1502 24	7	C3 風木	ナゾ	斜め朝日→ミガキ	朝日(巻貝?)→ へら状工具によるナゾ	淡黄灰色	淡黄灰色	淡灰褐色	○	○	○	○			
第1502 25	—	—	不明瞭	—	—	不明瞭	白黄土色	—	白黄土色	○	○	○	○		
第1502 26	—	C3 28(3)	ミガキ	斜め朝日→不明瞭	ナゾ	淡黄褐色	淡黄土色	白褐色	○	○	○	○			
第1502 27	8	I2 23	不明瞭	—	巻貝(巻貝?)→ミガキ	淡黄褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 28	8	—	—	—	巻貝→朝日→ミガキ	淡黄褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 29	—	I2 34	ナゾ	—	巻貝→ミガキ	淡茶色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 30	8	D2 S8(2)	沈澱→ナゾ	—	ナゾ	淡茶褐色	—	淡褐色	○	○	○	○			
第1502 31	8	D3 基	朝日→朝日→ナゾ	—	丁寧なナゾ	明褐色	—	暗黄褐色	○	○	○	○			
第1502 32	8	F3 14(2)	丁寧なナゾ	—	巻文→巻文→丁寧なナゾ	淡黄灰色	—	灰褐色	○	○	○	○			
第1502 33	8	C3 365	巻文→沈澱→ミガキ	—	ミガキ	明茶褐色	—	明茶褐色	○	○	○	○			
第1502 34	8	E2 6	巻文→沈澱→朝日→ ミガキ	—	丁寧なナゾ	淡灰褐色	—	白灰色	○	○	○	○			
第1502 35	8	F3 S8(1)	巻貝殻(巻文)→ナゾ	—	ナゾ	淡灰褐色	—	濃灰褐色	○	○	○	○			
第1502 36	8	D2 24(種)	不明瞭	—	不明瞭	黄灰色	—	淡黄灰色	○	○	○	○			
第1502 37	—	B3 406	不明瞭	—	丁寧なナゾ	赤茶色	—	明赤茶色	○	○	○	○			
第1502 38	9	E3 1	沈澱→ナゾ	—	粘土層付→朝日→ナゾ	淡褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 39	8	D2	巻文→ナゾ	—	不明瞭	褐色	—	茶褐色	○	○	○	○			
第1502 40	—	I2 25	不明瞭	—	ミガキ	明褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 41	8	C3 345	巻文→不明瞭	—	不明瞭	白褐色	—	白褐色	○	○	○	○			
第1502 42	—	A3 30(種)	巻文→ナゾ	—	二枚貝殻→朝日→ナゾ	淡黒褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 43	—	C3 360	巻文→丁寧なナゾ	—	不明瞭	白黄土色	—	白褐色	○	○	○	○			焼成跡穿孔有り
第1502 44	—	D2 7	不明瞭	—	ナゾ	淡黄褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 45	—	D3 30(種)	不明瞭	—	丁寧なナゾ	褐色	—	茶色	○	○	○	○			
第1502 46	8	—	ミガキ	—	巻文→ナゾ	淡茶色	—	明褐色	○	○	○	○			
第1502 47	8	C3 214	丁寧なナゾ	—	不明瞭	淡黄褐色	—	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 48	8	F3 214 並	不明瞭	—	不明瞭	淡茶褐色	—	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 49	—	C3 399	丁寧なナゾ	—	朝日(二枚貝?)→ 丁寧なナゾ	灰褐色	—	淡黒褐色	○	○	○	○			焼成跡穿孔有り
第1502 50	—	F2 73	ナゾ	—	丁寧なナゾ	淡褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 51	—	F3 (2)	沈澱→不明瞭	—	ミガキ	白褐色	—	淡黄土色	○	○	○	○			
第1502 52	8	D3 風木	巻文→沈澱→朝日→ 丁寧なナゾ	—	不明瞭	茶褐色	—	黄褐色	○	○	○	○			
第1502 53	8	G2	不明瞭	—	ミガキ	明褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 54	8	D3 風木	丁寧なナゾ	—	不明瞭	黄褐色	—	黄褐色	○	○	○	○			外面、赤色顔料付着
第1502 55	—	D3 108	不明瞭	—	不明瞭	淡茶色	—	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 56	—	B2 3	不明瞭	—	丁寧なナゾ	白褐色	—	白黄色	○	○	○	○			焼成跡穿孔有り
第1502 57	—	I2 45	巻貝(巻貝?)→ミガキ	—	ミガキ	淡黄褐色	—	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 58	8	I2 37	沈澱→ミガキ	—	ミガキ	淡褐色	—	淡褐色	○	○	○	○			
第1502 59	8	B3 340+B3 294(並)	沈澱→押引文→ミガキ	—	ミガキ	褐色	—	淡黒褐色	○	○	○	○			断面に縞目の痕跡有り
第1502 60	8	—	巻文→沈澱→ナゾ	—	ミガキ	淡黄褐色	—	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 61	—	C3 57(2)並	巻文→沈澱→ミガキ	—	ミガキ	淡茶褐色	—	白黄土色	○	○	○	○			
第1502 62	8	C3 409	巻文→沈澱→ミガキ	—	ミガキ	淡黄褐色	—	白黄土色	○	○	○	○			
第1502 63	—	—	ミガキ	—	ミガキ	淡茶褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 64	—	C3 70(2)	ミガキ	—	ミガキ	淡黄褐色	—	淡茶褐色	○	○	○	○			
第1502 65	—	C3 38	凹線→ミガキ	—	ミガキ	明褐色	—	栗褐色	○	○	○	○			
第1502 66	—	B3 321	ミガキ	—	ミガキ	淡褐色	—	淡褐色	○	○	○	○			
第1502 67	—	—	沈澱→ミガキ	—	ミガキ	淡茶褐色	—	淡褐色	○	○	○	○			
第1502 68	—	C3 127	ミガキ	—	ミガキ	淡黄褐色	—	淡灰褐色	○	○	○	○			
第1502 69	—	D3 P9	ミガキ	—	ミガキ	黒褐色	—	淡褐色	○	○	○	○			
第1502 70	8	C3 172	巻文→ナゾ	—	巻文→丁寧なナゾ	白褐色	—	黒褐色	○	○	○	○			
第1502 71	—	—	不明瞭	—	朝日(二枚貝?)→不明瞭	淡黄褐色	—	明黄土色	○	○	○	○			
第1502 72	—	—	丁寧なナゾ	—	ナゾ(ケズリ取の痕 跡となって)	淡茶色	—	淡茶色	○	○	○	○			
第1502 73	—	—	ナゾ	—	ナゾ	淡黄土色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			
第1502 74	8	—	二枚貝殻→ナゾ	—	二枚貝殻→ナゾ	濃黒灰色	—	濃黒灰色	○	○	○	○			
第1502 75	—	—	不明瞭	—	不明瞭	明黄褐色	—	淡黒褐色	○	○	○	○			
第1502 76	—	C23 風木	ナゾ	—	丁寧なナゾ	黄褐色	—	明黄褐色	○	○	○	○			
第1502 77	8	B2	二枚貝殻→ナゾ	—	二枚貝殻→ナゾ	淡黄褐色	—	淡黄褐色	○	○	○	○			焼成跡穿孔。土質異質部は 打ち欠きによるものか。
第1502 78	8	子午146(並)	工具による調整痕跡→ナゾ	—	工具によるナゾ(調整)	淡茶色	—	淡茶褐色	○	○	○	○			

C3 49(2)

第4表 出土石器観察表

拝印番号	写真 回数	出土位置等 (注記)	器 種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	備 考
第1708 1	10	E-2 4トレンチ	石鏃	サヌカイト	210	140	0.35	0.77	先端部欠損
第1708 2	10	B-3 板3型	石鏃	サヌカイト	150	120	0.25	0.33	先端部・側部欠損
第1708 3	10	B-2	石鏃	サヌカイト	220	160	0.40	1.33	
第1708 4	10	板5号型	石鏃	サヌカイト	280	180	0.80	2.30	
第1708 5	—	C-3	石鏃	巖呂系黒曜石	215	155	0.30	0.62	
第1708 6	10	C-2-3	石鏃	サヌカイト	255	170	0.45	0.99	
第1708 7	—	G-2 板3型	石鏃	総島産黒曜石	220	185	0.50	1.01	先端部欠損
第1708 8	10	B-2 30層	石鏃	総島産黒曜石	200	150	0.40	0.79	
第1708 9	—	B-3	石鏃	サヌカイト	290	195	0.70	2.54	一部欠損
第1708 10	10	F-3 24層	石鏃	サヌカイトか	185	145	0.40	0.69	
第1708 11	—	C-2	石鏃	総島産黒曜石	190	180	0.30	0.94	先端部欠損
第1708 12	10	4トレンチ	石鏃	サヌカイトか	225	160	0.40	0.91	
第1708 13	10	B-3 3	石鏃	総島産黒曜石	275	195	0.65	2.77	
第1708 14	10	B-3	石鏃	サヌカイト	350	240	1.00	4.76	先端部欠損
第1708 15	10	E-3 2トレンチ	石鏃	総島産黒曜石	155	135	0.35	0.54	先端部欠損
第1708 16	—	B-3 2トレンチ	石鏃	安山岩か	190	180	0.50	0.94	
第1708 17	10	C-3 3	石鏃	サヌカイト	250	150	0.40	0.96	
第1708 18	—	C-4 一括	石鏃	総島産黒曜石	235	155	0.45	0.63	片側一部欠損
第1708 19	—	C-2	石鏃	総島産黒曜石	210	125	0.30	0.61	先端部欠損
第1708 20	—	24号土坑1	石鏃	サヌカイト	230	120	0.20	0.52	片側一部欠損
第1708 21	10	C-3	石鏃	サヌカイトか	210	165	0.45	0.77	
第1708 22	10	A-3 1	石鏃	サヌカイトか	190	165	0.40	0.79	
第1708 23	10	D-3 風割木型	石鏃	総島産黒曜石	220	185	0.50	1.01	
第1708 24	10	G-2 75 (1)	石鏃	サヌカイトか	150	120	0.25	0.33	断面線、先端部・側部一部欠損
第1708 25	—	D-2 24層	石鏃	総島産黒曜石	175	110	0.30	0.53	断面線
第1708 26	10	C-3 378	石鏃	サヌカイトか	210	175	0.35	0.95	断面線
第1708 27	10	一括	石鏃	サヌカイト	225	130	0.30	0.56	断面線
第1708 28	11	C-4 37	石鏃	総島産黒曜石	190	160	0.50	0.82	断面線、先端部欠損
第1708 29	11	17号土坑4	石鏃	サヌカイト	210	150	0.35	0.79	断面線
第1708 30	11	E-3 3	石鏃	総島産黒曜石	220	175	0.40	0.90	断面線、片側一部欠損
第1708 31	11	F-2 (1) 一括	石鏃	総島産黒曜石	300	155	0.50	1.22	断面線
第1708 32	11	B-3 188	石鏃	サヌカイトか	255	155	0.40	1.11	断面線、先端部欠損
第1808 33	11	一括	エンドスクレイパー	巖呂系黒曜石	220	220	0.75	4.08	欠損品
第1808 34	11	C-24層 明力土層	スクレイパー	総島産黒曜石	305	285	1.00	7.97	
第1808 35	11	H3 (1)	スクレイパー	サヌカイト	540	510	0.80	26.98	
第1808 36	11	一括	スクレイパー	サヌカイト	725	510	1.00	33.58	
第1808 37	11	一括	スクレイパー	サヌカイト	665	450	1.30	37.37	
第1808 38	—	4号土坑	尖頭状石鏃	緑泥片岩	845	205	0.80	15.84	
第1808 39	—	一括	二次加工削片	巖呂系黒曜石	690	240	0.65	7.59	
第1808 40	—	C-3 24層	使用痕削片	巖呂系黒曜石	680	270	0.60	9.24	
第1808 41	—	A3	使用痕削片	巖呂系黒曜石	590	245	0.80	8.72	
第1808 42	11	D-3 455	打製石斧	?	1030	510	1.60	123.91	
第1808 43	11	C-2	打製石斧	?	1030	690	0.90	64.53	
第1808 44	—	C-2 5層	打製石斧	結晶片岩	890	840	0.90	122.80	
第1808 45	—	K-3 3	打製石斧	?	1200	1210	0.90	172.40	
第1808 46	—	C-3 290	打製石斧	緑色片岩	1460	940	0.90	199.30	欠損品
第1808 47	—	C-3 328	打製石斧	角閃安山岩	1810	1040	2.20	525.20	
第1808 48	—	B-3	打製石斧	角閃安山岩	1680	1010	2.50	458.40	欠損品
第1808 49	—	D-3 227	磨製石斧	?	780	450	2.00	108.20	欠損品
第1808 50	11	D-3 398	磨製石斧	粒紋岩	840	480	1.80	94.29	
第1808 51	—	B-2 146	磨製石斧	?	690	440	2.00	83.72	
第1808 52	11	F-2 61 (1)	磨製石斧	粒紋岩	880	470	1.50	75.54	
第1808 53	11	D-3 (1) 49	磨製石斧	粒紋岩	1170	550	2.10	178.30	
第1808 54	—	D-3 455	磨製石斧	?	1030	450	1.30	98.24	
第1808 55	—	風割木型	磨製石斧	?	970	540	3.00	203.60	欠損品
第1808 56	11	C-3 376	磨製石斧	?	1260	480	3.50	318.40	
第1808 57	11	352	磨製石斧	?	1075	310	1.90	112.83	
第1808 58	11	D-3 黒	磨製石斧	?	1240	670	3.30	418.40	欠損品
第1808 59	—	5号土坑	磨石	?	1120	910	4.50	769.10	



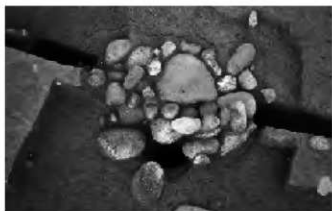
1号竖穴



3号集石



2号竖穴



4号集石



1号集石



1号土坑



2号集石



2号土坑

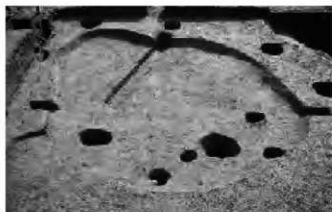
写真図版 2



3号土坑



8号土坑



4号土坑



9号土坑



6号土坑



10号土坑



7号土坑



11号土坑



12号土坑



16号土坑



13号土坑



17号土坑



14号土坑



18号土坑



15号土坑



19号土坑

写真図版 4



20号土坑



25号土坑



21号土坑



26号土坑



22号土坑



27号土坑



23号土坑



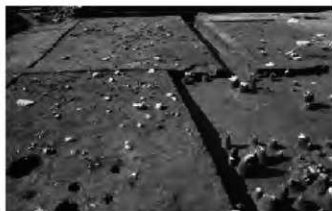
28号土坑



29号土坑



D2・3区遺物出土状況



A3~C3区遺物出土状況



E2・3区遺物出土状況



B4・C4区遺物出土状況



F2・3区遺物出土状況

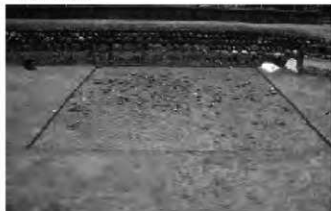


C3区遺物出土状況



G2・H2区遺物出土状況

写真図版 6



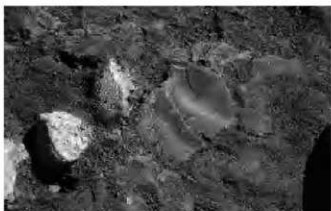
I2区遺物出土状況



C3区遺物出土状況



土層断面図



C3・4区遺物出土状況



福田K2式土器出土状況



G3・2区縄文土器出土状況



磨製石斧出土状況



宿毛式土器出土状況



10-1



10-2



10-3



10-4(a)



10-4(b)



11-7



11-9



11-13



12-19(b)



11-15



11-16



12-19(a)



12-17(b)



12-24(b)



12-22(b)



12-17(a)



12-24(a)



12-22(a)

出土遺物 1 (縄文土器 1)



12-20



12-21(c)



13-27



12-21(b)



12-21(a)



13-28



13-30



13-31



13-32



13-33



13-34



13-36



13-39



14-42



13-35(b)



13-46



13-47



13-35(a)

出土遺物 2 (縄文土器 2)



13-38(b)



14-41(a)



14-41(b)



13-38(a)



14-48



14-52



14-53



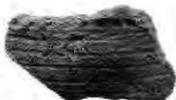
15-59



15-57



14-54



15-60



15-62



15-70



16-74



16-77



16-78(b)



16-78(a)



16-78(c)

出土遺物 3 (縄文土器 3)



17-1



17-2



17-3



17-4



17-6



17-8



17-10



17-12



17-13



17-14



17-15



17-17



17-21



17-22



17-23



17-24



17-26



17-27

出土遺物 4 (石器 1)



17-28



17-29



17-30



17-31



17-32



18-33



18-34



18-35



18-36



18-37



18-42



18-43



19-50



19-52



19-53



19-57



19-58



19-56

出土遺物 5 (石器 2)

報告書抄録

ふりがな	おおひいわいばるいせき に
書名	大肥祝原遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	64
編著者名	今田秀樹・土居和幸
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年2月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大肥祝原遺跡 D区	大分県日田市 大字夜明 字道ノ外 1574ほか	442046	651004	33°19'29"	130°52'16"	19990914 ～20000117	2,255㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大肥祝原遺跡 D区	集落跡	縄文時代	竪穴2基 集石5基 土坑29基 ピット	縄文土器、石器	

大肥祝原遺跡Ⅱ

日田市埋蔵文化財調査報告書第64集

2006年2月24日

編集 日田市教育委員会文化財保護課
877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発行 日田市教育委員会
877-8601 大分県日田市田島2-6-1
印刷 尾花印刷株式会社
大分県日田市田島本町8-8